巻頭言

未知との遭遇，その連続 ── 回顧と現在

東京大学 名誉教授
古畑和孝（ふるはた　かずたか）

心理学を志して70年。私は伝統ある心理学科ではなく，戦後創設されたばかりの教育心理学科を目指した。ところが，心理学科では「教育」の人，教育学部では「心理」の人と言われた。最初の演習のひとつ「双生児研究」に夢中になった。いきなり「遺伝と環境」という根本問題と格闘。その初志は，形こそ変われ，結局現在にまで続いている。

大学院では，宮城音弥講師が励まされた。「メダマ（視知覚の実験心理学）とネズミ（動物行動の学習心理学）は今盛んだが，人間の心理学を目指そう」と。密かに共感したが，力不足と本格的研学の要も痛感。1960年，フルブライト・プログラムとイリノイ大学フェローシップにより，米国留学が実現。生涯で最も研学に専心できた4年間となった。

指導教授ランケル先生の強い推輓により，社会心理学の第一人者ニューカム先生の未公刊の大著『社会心理学：人間の相互作用の研究』の翻訳を託された時には，社会心理学への志はいっそう顕著になっていた。

1964年帰国と同時に，国際基督教大学（ICU）の教員となった。その間，1972年の国際心理学会議（ICP）での「斉合性」（Consistency）に関するシンポジウムへの出演は特に忘れ難い。座長ジンバルドー教授との間での信頼関係は，後に『現代心理学』や『心理学への招待』（DVD 1～26巻）の監訳にもつながった。指定討論者ジャニス教授による「社会心理学と児童心理学にまたがる貢献」との評は，過分にせよ，まさに自分の志したことだった。

東京大学に全国で初の社会心理学独立専修課程が設立され，1977年に赴任し，非力ながらも全力を傾注した。社会学と心理学は交わらないとの評を，如何にして克服するかにも腐心した。社会学出身の辻村明教授の統括の下，いくつもの大きな共同研究が実現する結果となった。また，幾多の優秀な社会心理学者を輩出できたことも感謝である。

東大退官後，帝京大学での16年間には，道徳性発達や価値観形成の共同研究なども推進。熱心かつ優秀な共同研究者に恵まれた故でもあったろう。退職後，進行癌が発覚したが，その回復後，ネット上で公開日記をものし，未面識の人たちと交信しつつある。超高齢社会に伴い，介護・支援を要する人たちとは，デイサービスでの交流もしつつある。デジタルネイティブの子どもをいかに育てるかも極めて大切だ。

今や新型コロナウイルスの禍は，未知との遭遇の最たるものだが，心理学の出番もあるはずだ。若手研究者の活躍が待望されるや大である。

Profile―
1931年，金沢市生まれ。1954年，東京大学教育学部教育心理学科卒業。同大学院修士課程，博士課程，助手を経て，米国イリノイ大学大学院留学。1964年同博士課程修了（Ph.D.）。国際基督教大学，東京大学文学部，帝京大学文学部教授を歴任。専門は社会心理学，教育社会心理学，発達社会心理学。著訳書は『よりよい学級をめざして』（学芸図書），『好きと嫌いの人間関係：魅力と愛の心理学』（有斐閣），『人間性を育てる教育』（慶応義塾大学出版会），ニューカム他『社会心理学：人間の相互作用の研究』（訳，岩波書店）など多数。